

修士論文要約

伝統野菜と科学技術の「種（タネ／シュ）」をめぐる民俗学的研究

— 蓼科で野菜を育てる農家の暮らしから —

Folkloric Study on Seed / Species of Traditional Japanese Vegetables and  
Vegetables from Scientific Agriculture:

A Case of Farmers Growing Vegetables in Tateshina

篠原 久仁子

SHINOHARA Kuniko

キーワード：種（タネ／シュ）、伝統野菜、在来知、科学知、蓼科

Keywords: Seed/Species, Traditional Japanese Vegetables, Indigenous Knowledge, Scientific Knowledge,  
Tateshina

## 1. 研究の背景と目的

1990年代以降、食や農業と観光を関連付けた研究が蓄積され、とりわけ食に力点を置いた観光現象は「フードツーリズム」と呼ばれている。その流れを受け、地域「固有」の食文化を象徴する食材として「伝統野菜」が再解釈されている。

伝統野菜と一般的な野菜の違いは「種（タネ／シュ）」にあり、伝統野菜は主に固定種から育つ。一方、流通している野菜の多くは、科学知を応用し、固定種をかけあわせて生み出したF<sub>1</sub>種から育つものである。タネ／シュに関する研究は従来、自然科学系の学問領域で対象とされてきたが近年は、社会科学的な視点を加えた研究も見られる。しかし、農家がタネ／シュとどのように共生しているのか、その様相は浮かび上がらない。そこで本研究では、民俗学的手法を用いて、農家の日常に着目する。

民俗学において、農業に関する研究蓄積があるのは生業研究である。対象は、民俗技術そのものから、地域戦略や農山漁村における諸問題まで広がりを見せ、科学技術を用いた農業に着目する研究も見られる。しかし、現代農業を捉えた民俗学的研究は稀で、まだ萌芽期といえる。

「伝統」については、ごく最近に成立し、捏造されたものだと明らかにされており、伝統野菜もまた、様々な要因によって創造され続けている。伝統野菜という概念は、その曖昧さゆえに多くの関係者が参画す

ることが可能になっていると指摘されており、各地でのブランド化の過程や保全するための取り組みに関する研究がみられる。

先行研究に共通する問題点は、F<sub>1</sub>種の普及により野菜が画一化したことへの反発として、伝統野菜に目が向けられたことが暗黙の前提とされている点にある。F<sub>1</sub>種が手軽に入手できる現在、固定種を採り継ぐ地域にあっても、二項対立はあてはまらないと考える。このような問題意識から、農家はなぜ、どのように伝統野菜とF<sub>1</sub>種の野菜を作り続けてきたのか、明らかにすることを目的とする。

## 2. 研究の方法と手続き

分析の方法として、在来知と科学技術に関する人類学の視点をを用いる。近年、両者が接触し融合するプロセスを考察することの重要性が指摘されていることを受け、本研究では、農家の暮らしから、野菜のタネ／シュをめぐる伝統と科学技術のハイブリッドな状況に着目する。

研究データは2018年8月から2019年10月までの間、長野県茅野市糸萱区で断続的に実施した計11回（45日間）のフィールドワークに基づく。農作業を手伝いながらの参与観察・聞き取り調査が中心である。

### 3. 研究の概要

本研究は、7つの章で構成されている。

第1章では、研究の背景と目的、研究方法を述べた。第2章では、全国の伝統野菜をめぐる動き、および「信州の伝統野菜」制度を概観した。第3章では、調査地の概要を蓼科の観光開発と関連づけながら記述した。

第4章では、糸萱区の伝統野菜「糸萱かぼちゃ」を育てる農家がどのようにタネ／シュを選択し、栽培してきたのかを考察した。事例からはF<sub>1</sub>種や農業技術を柔軟に取り入れながら、伝統野菜のタネ／シュも育て続けてきた様子が明らかになった。一方、カボチャについては、タネを採る技術、活用法など、暮らしの中で受け継いできた記憶が優先され、F<sub>1</sub>種への違和感として表出していたことを指摘した。

第5章では、「伝統野菜化」のプロセスを記述した。糸萱区において特徴的だったのは、観光地に隣接し、観光客や飲食関係者など外部とのかかわり合いが多いことである。結果、用途の分かりやすさや日持ちの良さから商品価値を見いだされた糸萱かぼちゃは、経済作物化が進み、様々なネットワークが広がっていることが明らかになった。

伝統野菜として販売していこうと試みる中で、シュとしての均一性が求められるようになっていた。元来、糸萱かぼちゃには色や形に個性があったため、大学に研究を依頼し、自然科学の観点からシュの統一を目指していた。また、タネ蒔き時期からタネ採りの仕方に至るまでも変化があったことを指摘した。

一方、もうひとつの伝統野菜「河童瓜」は、食べ方のわかりづらさ、旬の短さを理由に、従来通り、自家消費のみが続いている。このように、2つの伝統野菜が、外部のまなざしにより二分されていたことを指摘した。

第6章では、伝統野菜化に伴って生じた、タネ／シュとしての曖昧さをめぐるコンフリクトに焦点を当てた。糸萱に移住し、観光農園を営む園主が唯一、栽培している伝統野菜である糸萱かぼちゃについて、元農業指導員から「シュとしての不安定さ」を指摘されたことで栽培に迷いが生じていた事例をとりあげた。指摘した側も、シュを統一しすぎればF<sub>1</sub>種と変わらなくなってしまう、固定種とも言い切れない糸萱かぼちゃの現状を受け、揺れていた。このように、人が必ずしもコントロールしきれないタネ／シュの特性が浮き彫りとなった。

また、出荷にあたり、形質で商品価値の有無が判断され、排除される糸萱かぼちゃが生まれたことで、自身でタネ採りをしてきたタネへの愛着が表面化していた。農家が、好ましくない状況の糸萱かぼちゃに対し、大学で選定されたタネだと判断した事例から、重視しているのは科学知で均一化されたタネ／シュであることよりも、糸萱の土地で自らが採った在来知のタネ／シュであるかどうかであったことを指摘した。

同時に、「うまいカボチャ」と判断する基準も重なりあっており、タネ／シュを選び採る在来知が、糸萱の農家に共有されていることも明らかとなった。このような在来知と科学技術を応用し、より統一性のある糸萱かぼちゃを創る取り組みも始まっている。

### 4. 結論

第7章の結論で次の3点を指摘した。

①本研究が明らかにした、人間と在来知と科学知がハイブリッドに混在する様相は、伝統野菜のタネ／シュとF<sub>1</sub>種の二項対立、つまりは在来知と科学知の二項対立を越えるものである。暮らしに混在した在来知と科学知を使いこなす農家の在来知によって伝統野菜のタネ／シュが受け継がれていることを指摘した。さらに、経済的価値ももたらす伝統野菜制度や、観光地の存在も大きな役割を果たす。今や科学知を応用したF<sub>1</sub>種のような均一性も、混淆する。このように、在来知のタネ／シュ、科学技術のタネ／シュ、農業技術、伝統野菜制度、観光など様々な要素が絡み合っ

て現代を生きる伝統野菜が構成されている。

②伝統野菜化に伴い、野菜のタネ／シュや栽培技術の取捨選択が行われてきたプロセスを示すことで、現代を生きるタネ／シュと人間の複雑な在りようを明らかにした。このことは、科学技術も取り込んだ現代農業を扱う研究が不足している民俗学に対して新たな知見をもたらしたと言えよう。

③伝統野菜を地域内で消費するか、外部へ売り出していくものとするかによって、タネ／シュの扱い方が変わることが明らかになった。このことは、伝統野菜と観光との相関性を詳らかにするもので、観光業に直接携わっていない農家の暮らしにも観光が与える影響を示唆するものである。■